略語の分類とアクセント調査～複合語を中心にして～
Japanese Abbreviations: Their Classification and Accent -- Focusing on Compound Words

本発表は略語の分類とそのアクセントに関する考察である。今回は、１）略語はどのように形成されているのか、２）その形成過程で言葉のどの部分が残りやすく、どんな音が脱落しやすいのかを、最近の略語も含めて調査、分類した。また、３）略語としての許容度（軽音節＋重音節の組合せは本当に嫌われるのか、など）、４）アクセントは略語の形成に影響を与えるか、の２点を、日本人へのアンケート調査を通じて明らかにした。略語の調査には国立国語研究所のコーパス、毎索（毎日新聞データベース）、日本国語大辞典、Yahoo!ブログ、ツイッターなども使用した。

日本語の中には実に多くの略語が存在している。リモートコントロールは「リモコン」、クレジットカードは「クレカ」、ストライキは「スト」になる。さらに、「コンパ」（学生の親睦会）のように、「コンパニー」という元の語が同じ意味で使用されていたことがあるのかどうか分からないもの（石野 1993）もある。カタカナ語ばかりではなく、漢語とカタカナ語、漢語同士でも自在に略される。ケータイの着信メロディーは「着メロ」、郵便貯金は「郵貯／ゆうちょ」、国語研究所は「国研」になる。始めから略語として登場した「婚活」という語もあるが、「～活」という派生語はいくつもあり、それらは略語としてより漢字の造語力として考察した方が面白いかもしれない。

複合語の略語は「リモコン」のように [２拍＋２拍]で、つまり、前半の語頭から２拍、後半の語頭から２拍を取って構成されるものが多いが、そうならない語もある。漢語の場合は、「簡保（簡易保険）」や「阪大（大阪大学）」のように漢字の読み方が変わるものもあり、複雑である。また、漢字一文字が一形態素であるため、略語なのか頭文字の組み合わせなのか区別しにくい場合も多い（森岡 1988、他）。

アンケートでは筆者が作った略語を使用し、平板型と頭高型アクセント、３拍と４拍の語を組み合わせて、略語の形成にアクセントが影響するかどうかを調査した。また、ことばの中に特殊拍が挿入されたり脱落したりした場合にどの程度受け入れられるかも調査した。その結果、アクセントは、略語が４拍 [2+2]であれ３拍 [1+2 / 2+1]であれ、圧倒的に平板型が好まれること、また、ことばの中への特殊拍の挿入・脱落では、受け入れられやすいのは長音であり、嫌われるのは撥音と連母音（二重母音）であることが判った。「軽音節＋重音節の組合せは避けられる」という研究（伊藤 1990）にも矛盾しない結果となった。